

横浜善光寺留学僧育英会 第十一回辞令交付式

## 古田紹欽博士が講話

開山模庵白純大和尚十七回忌法要厳修

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）

は二月十日午後二時から、第十一回育英生の辞  
令交付式を善光寺釈迦殿で挙行した。

開山模庵白純大和尚

十七回忌法要

式典に先立つて善光寺開山模庵白純大和尚の  
十七回忌法要が大本山永平寺の南澤道人監院の  
導師で厳修され、勘松ヶ岡文庫長の古田紹欽博  
士による記念講話も行なわれた。

開山十七回忌法要は南澤永平寺監院の導師で、  
出班焼香により憩ろに営まれた。法要後、南澤  
監院は、  
「ご当山のご開山さま、模庵白純大和尚十七回

忌法要を勤めさせていただき、大変有難いご法縁を戴き、心から感謝を申し上げる。夙にこちらのご開山さまであり堂頭老師のご先師であられる模庵白純大和尚さまのご高名はご生前中承つていたが、直接お目にかかる機会もなく、何か遠い所に居られるご高僧というところで拝していた。たまたま私は現在、永平寺の監院という役にあり、こちらの堂頭さまが進めておられる留学僧育英会に理事というような責任のあるお役を頂戴した。そんなご縁でいろいろとご先代さまのこと、そしてまた、特にご内室であられたこちらの堂頭さまのお母さまのことなどをお伺いすることができ、何とも言えないご縁というか、そういったものを感じている。ご開山さまのこととは皆さま方は当然熟知しておられると思うが、お母さまが内助の功大変誉れの高いお方であつたと。しかも、私は長野県の更埴市の竜洞院の住職だが、お母さまは須坂市のご

出身と承り、何か一層身近に感ぜられた。また、私事で恐縮だが、私の母は明治三十五年生まれで、戦時中私がたまたま寺を離れて軍籍に在つたおり他界したが、丁度私の母親とも一つ違いぐらいのお年であられると思い、そんなことが余計私の心中深く感ぜられた。

模庵白純大和尚さまは大変立派なお師匠さまであられ、多くの寺を復興され、またご開山となられ、多くのお弟子さまをお育てになられて、お寺のためはもちろん、ご本山のために、仏教界のために大変なご活躍をなさつた。その法を受け継がれて、それぞれのお弟子さま方がご活躍されていることは、我々が常日頃尊敬して止まない、並大抵のことではないと思う。今日は大勢のご法縁のご老宿方、また檀信徒の皆さまのご臨席をいただき、只今ご開山さまの十七回忌の法要を、宗門においては最高の儀礼である出班焼香で厳かに勤めさせていただくこ

とができた。

仏法は国籍も人種の違いも超えた、全世界に普遍的なものだ。その法縁により今日を生かさせていただいている。この喜びは何事にも換え難い。ご縁をいただいたからには、我々自身が、より良い法縁をつくることが仏法を信ずる者、仏道を歩む者の努力と思う。堂頭さまは国際的な事業を手掛けておられる。ご開山さまのお徳を受け継ぎ法のご縁に報いるということを身を以てお示しいただいている。大変有難いことだ。ご開山さまのお徳をおしのび申し上げ、仏法のご縁をいただいて今日生かさしていただいている喜びを、少しでも多く、仏法のために世界のために努力精進したいとより一層心に思つた。ご當山のますますのご隆昌を祈念し、堂頭老師にご健勝でご活躍いただきたいと念願する。」と挨拶した。

### 採用された育英生は計六十一人に

宮本延雄理事（鶴見大学学監）の司会で辞令交付式が行なわれ、はじめに佐藤俊明常務理事が選考の経過を報告。さらに黒田理事長の導師により、育英生五人の弁道精進・法身堅固・道中安全・心願成就を祈念して仏祖諷經が営まれ、黒田理事長から一人々々に辞令と育英金が手渡された。

世界に活眼を開く人材の育成を目指し、善光寺の開創十五周年を記念して黒田住職が設立した同育英会は、昨年で十周年を迎えた。平成七年度・第十一回育英生として新たに採用されたのは五人で、これにより第一回から第十一回までに採用された育英生は六十一人になった。

辞令交付を受けた育英生は、龍谷大学大学院博士課程を終了しインドのカルカッタ大学大学院博士課程に留学した宇野恭章（やすあき）氏、

大本山總持寺祖院専門僧堂の修行を了えてアメリカへ留学する遠藤博因師、中国福建省の閩南仏学院講師を経て駒澤大学仏教学部に研究留学している湛如氏、日本で出家得度し曹洞宗僧侶として禅画・仏教美術の研究・普及に努めているポーランド人の如玄ノバク氏、中国人留学生で大阪教育大学大学院修士課程二回生の呂鉄氏。

### 古田紹欽博士が記念講話



古田紹欽博士

記念講話を行なつた古田博士は、横浜の朝日カルチャーラーニング講座で道元禅師の『正法眼藏』を長く講義していることを話し、「道元禅師の思いは私の人生に深く刻まれている。禅師の法恩を身に体している。その法縁でここへ参ったことを有り難く思つてゐる」と前置きして、人生の一端を披露しつつ次のように述べて育英生を励ました。

「私は十歳で仏門に入った。貧乏な寺で、小僧が十一人いた。日曜日ごとに托鉢をして、やつと火井粥を食べて過ごした。栄養失調で皮膚病にかかり、寒中も足袋をはかず、あかぎれが痛くて風呂へも入れなかつた。師匠の衣にすがつて、学校へ行きたいと私が泣くので、師匠は辛うじて中学へ生かしてくれた。

金が無ければ学問はできない。しかし金があつても学問はできない。何としても、石にかじりついても、この因縁をいただいた限りは有

り難い、という思いが得られるようなことを人生の中で体験していただきたい。育英金を糧として、自分が納得のいくように使うことができたら、仏門に生きる者が共々に喜びとすることができる」

また東隆眞理事（駒沢女子大学副学長）は次のような激励の言葉を贈った。

「世界各地に民族紛争、地域紛争が絶えない。混迷・無秩序はいつまで続くのか。日本は次々に内閣が交代し、不安定な状態が続いている。兵庫県南部地震の大惨事はこの世のものではない。世の中には予想もつかないことが起きることを教えてくれた。この時代、仏教の教えを今さらながら尊く思う。仏教の真理をしつかりと胸に受けとめて、一日々々を大切に生きたいものと改めて願っている。

後ろ向きの学問より前向きの学問をして下さい。二十一世紀の仏教を明らかにする学問をし

て下さい。死んだ仏教ではなく、生きた仏教を学んでいただきたい。欧米でも仏教は多くの人々から関心と期待をもつて、二十一世紀の指針として求められている。これから新しい本物の仏教は、善光寺の育英生の中から生まれると確信している」

最後に本寺の光真寺黒田光純住職が「願心をもつことが大切だ。世界平和は一人の思いから芽生えてくる」と謝辞を述べた。斎座では地元選出の横山敏明宗議が挨拶し、友人の洞外文隆宗議が献杯の発声を行った。

